

ベゼクリク第 20 窟誓願図のトカラ語題記について*

荻原裕敏

キーワード: クチャ仏教 ウイグル仏教 ベゼクリク 誓願図

要旨

トゥルファン・ベゼクリク第 20 窟の回廊には 15 面の誓願図が描かれていた事が知られており、それぞれの誓願図の上部にはブラーフミー文字によるサンスクリット題記が書かれ、当該の誓願図の内容を説明するものとなっている。これらのサンスクリット題記は 1913 年に Lüders によって初めて内容比定が提出され、(根本)説一切有部に関連する事が明らかにされたが、その他の誓願図と異なり、第 5 面の誓願図には画面に描かれた比丘にも小さなブラーフミー文字による題記が附されている。本稿では、ベルリン所蔵のトカラ語文献を利用し、これまで不十分な解釈しか行われていなかった第 5 面の比丘に附された当該の題記が、サンスクリットではなく、トカラ語によって書かれたものである可能性を指摘する。また、新たに解読に成功したトカラ語題記を利用し、トカラ仏教とウイグル仏教との関連についてトカラ語文献学の側から新しい資料を提出すると共に、トカラ語と古代ウイグル語との言語接触の問題についても検討する。

1. 導入

本稿ではトゥルファンのベゼクリク第 20 窟に描かれていた誓願図の内、第 5 面に附されたブラーフミー文字題記を扱う。この石窟の回廊には 15 面の「誓願図」と称される仏教壁画が描かれていた事が知られており、それぞれの誓願図の上部にはブラーフミー文字によるサンスクリット題記が書かれていた。誓願図の内容を示すこれらのサンスクリット題記の対応部分が(根本)説一切有部系の文献に見出される事は Lüders (1913) によって既に指摘されているが、その内の第 5 面にはその他の誓願図とは異なり、画面中央を占める仏陀の右足に跪く比丘にもブラーフミー文字による題記が書かれている。この題記の解釈については、Le Coq (1913: Tafel 21) が Siegling の解釈を引用し、比丘の名前を記したものと推定しているが、内容及び言語については確定する事ができないまま、現在に至っていた。第二節ではこの題記を紹介した後、ベルリン所蔵のトカラ語 B 断片 B431 の内容説明を通して、当該題記の内容及び言語を明らかにす

* 本稿は、2015 年度第 1 回中央アジア科研(代表: 宮治昭 基盤(B)『中央アジア仏教美術の研究—釈迦・弥勒・阿弥陀信仰の美術の生成を中心に—』全体研究会—中央アジアの仏教文献と美術—(2015 年 6 月 13 日(土)龍谷大学深草キャンパス))にて行った「トカラ語仏典から見た西域北道における仏典受容のあり方」と題する発表の一部に加筆修正を行ったものである。発表当日貴重なコメントを頂いた専門家の方々並びに本稿の草稿に対してコメントを頂いた森安孝夫大阪大学名誉教授・松井太教授(大阪大学)には深く感謝申し上げます。また、本稿第三節[C]の部分は、新疆龟兹研究院・北京大学歴史学系中国古代史研究中心・中国人民大学国学院西域歴史語言研究所による共同研究『龟兹地区現存吐火羅語写本与題記的調査与研究』の成果の一部であり、出版予定の調査報告書にも収録される事となっている。なお、内容に関する全ての責任は筆者が負っている。

る。第三節では、当該題記がトカラ語で書かれたとする筆者の解釈に基づいて、新たに解説に成功したトカラ語題記を利用し、トカラ語文献学の側からトカラ仏教とウイグル仏教との関係を示す新しい資料を提出すると共に、トカラ語と古代ウイグル語との言語接触についても検討する。

2. ベゼクリク第 20 窟誓願図第 5 面のブラーフミー文字題記について

2-1. ベゼクリク第 20 窟誓願図第 5 面のブラーフミー文字題記

ベゼクリク第 20 窟に描かれた 15 面の誓願図は、それぞれの誓願図の上部に壁画の内容を説明したブラーフミー文字によるサンスクリット題記が書かれている。これらのサンスクリット題記の一部は、対応する内容が根本説一切有部の広律である『根本説一切有部毘奈耶薬事』に見出される事が Lüders (1913) 及び Huber (1914: 9-14) の研究によって既に明らかにされているが、この事実は当該の誓願図が(根本)説一切有部と称される部派の影響を受けている事を示しており、その後の研究によって、ベゼクリクに見出される誓願図が当時西域北道で受容されていたクチャのトカラ仏教に由来する事が指摘されている¹。

第 20 窟に描かれた誓願図の中でも第 5 面と称される誓願図は²、その他の誓願図とは異なり、画面中央に描かれた仏陀の右足に跪く比丘にも小さなブラーフミー文字による題記が附されている。この題記については Le Coq (1913: Tafel 21) が指摘しており、そこでは当該題記のローマ字転写 *śīlāsānte śīla vānde* (脚注の内容から *śīlāsānte śīlavānde* の印刷ミスと考えられる) と共に、題記の下に描かれた比丘の名前であるとする Siegling の推定が記され、また脚注には当該題記ではサンスクリットの語末の *-a* に対して *-e* が用いられている事から、トカラ語話者によって書かれた可能性を指摘すると共に、サンスクリットの *śīlāsāntaḥ śīlavān* を意味するものではないかとする同氏の解釈も疑問符付きで引用されている³。また、この題記の解釈については、村上 (1984: 98, 100) が題記本文に若干の修正を加え、新たに *śīlāsānte śīlam vande* と読み替えた上で、『戒によって寂静となって戒に[私は]敬礼する』という和訳を提出し、絵を描いた者が自らの心情を記したものと推定している。

この題記に在証される二つの語、特に Skt. *śīlāsāntaḥ* に対応すると見られる *śīlāsānte* が *-e* で終わっている事から、トカラ語話者によって書かれたとする Siegling の推定が正しいならば、この題記はサンスクリット題記として解釈できるが、問題は後続する *śīlavānde* である。この語はサンスクリットとしては解釈できないため、トカラ語の可能性が否定できないが、この題記が出版された当時、西域北道各地の仏教遺跡から齎されたトカラ語文献は資料の体系的な出版に

¹ ベゼクリク第 20 窟及び同窟の誓願図並びにその教義的・歴史的背景については、村上 (1984)、Konczak (2013)、橘堂 (2013) 及び森 (2015) などを参照。

² この誓願図の内容とサンスクリット題記については、村上 (op.cit.: 97-100) を参照。村上 (op.cit.: 98) は、誓願図に附されたサンスクリット語を「阿難よ。獅子の力量あり人間の雄者であるシンハは、人王の私によって宝石の柄のついた傘蓋をもって供養された。」と和訳する。なお、この物語に対応するトカラ語断片は、管見の限り見当たらない。

³ 村上 (op.cit.: 100) はこの解釈により、当該題記を『戒によって静寂なる者、戒を有する者』と和訳している。

は至っておらず、若干の資料と文法に関する研究が出版されていたのみであった。また、同じ時期に齎されたサンスクリット資料もほぼ同様な状況にあったため、当該題記解明のための資料が著しく不足していた点は否めない。そのため、当該題記を解釈するためには、その後出版・公表された資料を含めて、この語が文献資料中に在証されるか否か、また在証されるとすれば、その資料がどの言語によって書かれていたかを確認する必要がある。筆者の調査の結果、この語はベルリン所蔵のトカラ語 B 断片 B431 に二度在証される事が明らかになった。以下、このトカラ語 B 断片の内容比定とそれに伴う当該断片の解釈を扱い、ベゼクリク第 20 窟誓願図第 5 面に書かれた未解明の題記の解釈を提示したい。

2-2. ベルリン所蔵トカラ語 B 断片 B431 の校訂と内容比定

ベルリン所蔵トカラ語 B 断片 B431 はドイツ・ベルリン国立図書館 (Staatsbibliothek zu Berlin) に所蔵されており、現在では THT431 という登録番号が附されている (本稿では先行研究との繋がりも考慮し、B431 と称する)。この断片は 1953 年に *TochSprR(B)* II: 286-287 でローマ字転写が簡単な解説と共に出版され、その後トカラ語研究で一部が利用されてきたが、全体の内容の解明や現代語訳は未だに提出されていない。この断片が出版された際、この断片はインド或いはクチャの文化や仏教史に関連すると推定されるその他の文書と共に「歴史と文化 (*Geschichte und Kultur*)」に分類された。ここに分類される断片は B415-432 の番号 (現在の登録番号では THT415-432) が附されており、B416, B417 及び B430 にはクチャ国の王である *Suvarnapuṣpa* 及び同国の寺院の名前と考えられている *Yurpāṣka* が在証される。特に本節で扱う B431 がクチャのキジル発見である事を除いて、これらの断片が全てムルトウク (B415-428, B430) 及びセンギム (B429, B432) といったトゥルフアンの仏教遺跡で発見されている点は重要である⁴。

校訂者によって *TochSprR(B)* II: 286 に附された解説において、B431 は「*āvāsika* に関する紛争と *Śīlavanda* の賞賛 (Streit um *Āvāsikas*, Lob des *Śīlavanda* = *Śīlabhadra*?)」を扱ったものとされ、参考文献として Kern (1884) *Der Buddhismus und seine Geschichte in Indien*, Bd. II, p. 69 以下が指示されている事から、インド仏教史に関係する断片と考慮されていた事が窺える。1953 年の当該断片出版後、この断片の内容については特に新しい解釈が提出される事もないまま、現在に至っていたが (cf. CEToM: THT431)、筆者が再検討したところ、この断片はインド仏教史に関係するものではなく、「*Saṅgharakṣitāvādāna*」と称される比喩譚に比定されるべき事が明らかになった。以下、当該断片の転写・和訳とパラレルを提出する。

⁴ *TochSprR(B)* II: 276-287 で出版された断片の大部分は状態が悪く、これらの断片を利用して、クチャ或いはインドの仏教史を再構成する事は困難となっている。併しながら、最近の研究の進展によってこれらの断片の一部が実際にクチャの仏教史に関連し、歴史学的研究に利用できる事が明らかになりつつある。この点については、Ogihara (2015a: 155-156) を参照。

なお、ドイツ探検隊の言うムルトウクとは、ムルトウクだけでなく、ベゼクリク石窟をも包摂する事が西村・北本 (2010: 224-240) によって明らかにされている。この点については、T III M と記され、ムルトウク発見を示す M を有しているドイツ所蔵のトカラ語 A 断片 A384-393 (= THT1018-1027) に対して、これらの断片はベゼクリク石窟で発見された旨が *TochSprR(A)*: 212-217 に記されている事が傍証となる。従って、ドイツ所蔵のトカラ語断片の内ムルトウク発見とされる M を有する断片にはベゼクリク石窟で発見されたものが他にも含まれる可能性がある。これらベゼクリク石窟発見のトカラ語断片の存在は、本稿の趣旨と矛盾しない。

2-2-1. 転写と和訳

本節で検討するトカラ語 B 断片 B431 は、1953 年に *TochSprR(B)* II: 286-287 で初めてローマ字転写が出版された。断片のサイズは横 13.0×縦 4.0cm で、表裏共に散文で四行書かれている。断片は紐穴の右側ののみが残存しており、葉数は不明であるため、写本における位置は明らかにし得ない。また、ベルリン所蔵トカラ語断片中、同一の写本に属すると推定される断片も見当たらない。当該のテキストを表記したブラーフミー文字について見れば、Archaic に分類されるものは見られず、<ta>と<na>は明確に区別される⁵。また、このテキストの言語特徴は、Peyrot (2008: 222) では Classical Tocharian B に分類されている⁶。当該断片の写真は TITUS 及び CEToM のサイトで確認可能である。以下、断片のローマ字転写・音素転写及び和訳を与える⁷。

[Transliteration]

a

- 1 ||| ścirona rekauna weṣyem śwātsiṣṣe ime mā yamaṣyentrā
 2 ||| [cai] ṅake ṣamāñe erepatesa tṣaksentrā 6 || k_uce cewne no sa
 3 ||| mane maḷwāmane kwasnāmane † cey rano nauṣ₁ kāśyām₁ pa
 4 ||| yem † pakwāri † awāsiki † cenāṣ₁ ṣe śilawande tsuwa †

b

- 1 ||| w[e]ṣaṅ₁ kappi šeṣuwer tākam tumem cewśa alyaiḷ₁ tswāre tu
 2 ||| sikem paṣt₁ lyautar₁ tumem caiy paḷskāre wes yes lautso weś₁
 3 ||| [pa]rśai kamānte saṅkrāmne cārkāre cai śilavāndem ṣamā
 4 ||| ..s okosa ṅake tṣaksentrā 7 || k_uce cew nano saṅkrā

[Transcription]

a

- 1 ||| ścirona rekauna weṣyem śwātsiṣṣe ime mā yamaṣyentrā
 2 ||| [cai] ṅake ṣamāñe erepatesa tsäksentrā 6 || k_uce cewne no sa⁽¹⁾
 3 ||| mane maḷwāmane⁽²⁾ kwasnāmane † cey rano nauṣ kāśyām⁽³⁾ pa⁽⁴⁾

⁵ トカラ語写本の書写に使用されるブラーフミー文字の内、Archaic に分類される字形については、Malzahn (2007) を参照。

⁶ 現在トカラ語文献学では、トカラ語 B 文献が言語特徴及び文字特徴の両面から、それぞれ三つの段階に分類される事が明らかになっている。即ち、言語特徴の面からは、Archaic Tocharian B (4-6 世紀), Classical Tocharian B (5-6 世紀), Late/Colloquial Tocharian B (7 世紀以降) に、一方文字特徴からは Archaic (4-6 世紀), Standard (7 世紀), Late (8 世紀以降) に分類される。この二つの分類の内、言語特徴からの分類については Peyrot (op.cit.: 204-206) を、文字特徴に基づく分類については Malzahn (op.cit.) 及び Tamai (2011) を参照されたい。ただし、この二つの分類が年代的に同じ時代を反映するものであるか否かについては、今後も検討が必要である。

⁷ 以下の転写では下記の転写方式を採用する。

[]: 破損によって読みが不確定な箇所
 ∴: akṣara の欠けている子音若しくは母音
 †, ‡: 断片中の punctuation

(): 筆者によって推定された箇所
 |||: 写本の破損箇所
 { }: 破損によって推定された欠落部分

4 // *yem † pakwāri † awāsiki † cenas̄ se śilawande tsuwa †*

b

1 // *w[e]sāñ kappi śeśuwer tākaṃ tumem̄ cewśa⁽⁵⁾ alyaik̄ tswāre tu⁽⁶⁾*

2 // *(awā)sikem̄ pāst̄ lyautar̄ tumem̄ caiȳ pālskāre wes̄ yes̄ lautso wes̄*

3 // *[pa]rśai kamānte san̄krāmne cārkāre cai śilavāndem̄ śamā⁽⁷⁾*

4 // *(tunt)ś(e)⁽⁸⁾ okosā ŋake tsāksentrā 7 || k₁ce cew nano san̄krā⁽⁹⁾*

[注釈]

(1): Thomas (1986: 129) は b4 に基づき、この部分を *n(a)no sa(n̄krāmne)* と修正する。

(2): *TochSprR(B)* II: 287, fn. 1 に従い、*(pā)hwāmane* と修正する。なお、<pa>と<ma>の書き誤りは同じ行に再度在証される。

(3): *TochSprR(B)* II: 287, fn. 2 に従い、*kāśyā(p)* と修正する。なお、B42a2 に見られるようにトカラ語 B の語形は *kāśyap(e)** であり、第二音節は通常短母音であるが、ここでは書き誤りと推定される。この推定はサンスクリットと漢訳のパラレルによって裏付けられる。

(4): 前後の文脈から *pa(n̄aktentse)* 或いは *pa(n̄aktesa)* が推定される。また、後続する a4 の残存部分冒頭は *(se)yem* が再建されるかも知れない。なお、この部分に「仏陀」を表す語が推定される点については、*TochSprR(B)* II: 287, fn. 3 で既に指摘されている。

(5): *TochSprR(B)* II: 287, fn. 4 に従い、この部分を *cewśa* と修正する。

(6): この語は *tu(mem̄)* と推定する事ができるかも知れない。

(7): *TochSprR(B)* II: 287, fn. 8 に従い、*śamā(nem)* と推定する。

(8): *TochSprR(B)* II: 287, fn. 9 に従った。或いは *(cew yāmornn)ś(e)* が推定され得る。

(9): Thomas (op.cit.) は *san̄krā(mne)* と推定する。

[和訳]

a

1 [...] 彼等は荒々しい言葉を口にした。彼等は食べ物(を食べているという)意識を持たなかった。 [...]

2 [...] 今、彼等は僧侶の姿で焼かれている。//6//⁽¹⁾ (汝が)その寺院の中で(見た)人々 [...]

3 [...] し、不満を訴え、嘆いている [...] 彼等はまた以前迦葉仏の弟子達(?)であり [...]

4 [...] 行いの悪しき *āvāsika* 達がいた⁽²⁾。一人の持戒者が彼らの下に身を寄せた⁽³⁾。 [...]

b

1 [...] 我々は浄食を食べる事ができるだろう⁽⁴⁾。それから、そこに他の(持戒者達)が身を寄せた。それから(?) [...]

2 [...] 彼等は(行いの悪しき) *āvāsika* 達を追い出した。そこで、彼等は「お前達は我々を追い出した」と考えた。草(?)⁽⁵⁾ [...]

3 [...] 松明を持って来て、寺院に投げた。彼等は持戒者や比丘達を(焼いた?)⁽³⁾。 [...]

4 [...] この因果により、彼等は今焼かれている。//7//⁽¹⁾ (汝が)その寺院の中で(見た)人々 [...]

[注釈]

以下では B431a1-2 のパラレルを漢訳『因縁僧護經』(T.17, no. 749, 568c9-12) から、また、a2-b4 のサンスクリットのパラレルと英訳は Vogel and Wille (1996: 256, 277-278) から引用する。なお、上掲漢訳仏典中に見られる a2-b4 に対するパラレルについては、次節を参照されたい。

(1): B431a2 に在証される //6// 及び b4 に見られる //7// は、この比喻譚の主人公である *Saṅgharakṣita* が、仏陀の下に赴く途次で見た六番目及び七番目の寺院という事を表すと推定される。

a1-2: cf. Chi. 「惡口相罵。以是因緣。受鐵床苦。諸食器中。沸火漫流。筋肉消盡骨如焦炷。從迦葉佛涅槃以來。至今不息。」

a2-3: Cf. Skt. *vayaṃ kāśyapasya samyakṣambuddhasya śrāvakā āsān* ‘we were disciples of Kāśyapa, the perfectly enlightened one.’

a4: Cf. Skt. *duśśilāḥ pāpadharmāṇas te vayaṃ śilavadbhir bhikṣubhir vihārān niṣkāśitāḥ tair asmābhiḥ śūnyavihāra āvāsito. yāvat tatraiko paribhramam śilavān bhikṣur āgataḥ ...* ‘<When we had become> ill-disposed <and> ill-conducted, we ourselves <were> ejected from our monastery by well-disposed monks, <whereupon> we ourselves resided in an empty monastery. When a well-disposed monk arrived there on his lone journey ...’

(2): Skt.: *duśśilāḥ pāpadharmāṇas te vayaṃ śilavadbhir bhikṣubhir vihārān niṣkāśitāḥ tair asmābhiḥ śūnyavihāra āvāsito* ‘<When we had become> ill-disposed <and> ill-conducted, we ourselves <were> ejected from our monastery by well-disposed monks, <whereupon> we ourselves resided in an empty monastery.’を参照。また、Toch.B *awāsike** の原語と推定される Skt. *āvāsika-* ‘a resident (monk), staying at his (own) monastery’については、Silk (2008: 147-158) を参照されたい。

(3): Adams (2013: 691) は本断片に二度在証される *śilavānde* を二つの異なる語と見做し、a4 の *śilavānde* を人名 ‘Śilavanda’、また b3 の例を *śilavānde** ‘(adj.) extolling moral behavior’ (<Skt. *śila-* + *vanda-*) と別の見出し語として扱うが、a4 に対応する Skt.: *yāvat tatraiko paribhramam śilavān bhikṣur āgataḥ ...* ‘When a well-disposed monk arrived there on his lone journey ...’では、Toch.B *śilavānde* は Skt. *śilavat-* ‘well-conducted’ (MW: 1079b) に対応していることから、中期インド語形として推定される **śilavanto*, **śilavantaḥ*, **śilavāntaḥ* を原語としたインド語からの借用語であったと考えられる⁸。この対応に鑑み、Toch.B *śilavānde* を ‘Śilavanda (PN)’ 或いは ‘(adj.) extolling moral behavior’ とする従来の解釈は否定されるべきである。なお、古代ウイグル語の借用語として、Skt. *śilavat-* ‘well-conducted’ に由来すると考えられている *śilavanti* (ウイグル文字表記) 或いは *śilavanti* (ブラーフミー文字表記) は、この Toch.B *śilavānde* ‘well-disposed (monk)’ を原語としたものであったと考えられる⁹。

⁸ これらの語形は、サンスクリットの *-vat* 語幹名詞の男性単数主格が類推による *-nt-* を伴った語形である (cf. BHS: 102)。また、b3 に対応する Skt.: *tatra ca bahavaḥ śaiḥśaiḥśaiḥ bhikṣavo dagdhās* ‘and many monks to be trained and no longer to be trained <were> burnt in it.’ も参照。

⁹ この古代ウイグル語の語彙の解釈については、Zieme (1981: 249) 及び Maue (1996: 201-202) を参照。また、古代ウイグル語の *śilavanti* が Toch.B *śilavānde* の借用語であると考えられる点は Wilkens (2015: 248) が指摘しているが、古代ウイグル語の語形との対応以外には根拠を挙げておらず、Toch.B *śilavānde* の語義の確定にも至って

b1: Cf. Skt. *ayam eko 'smākaṃ dakṣiṇāṃ śodhayiṣyatīti | sa tatraivāvasthito yāvat tasyānuṣaṅgena punar api bahavo bhikṣavaḥ śīlavanto 'bhyāgataḥ ...* '<for> he alone will get an expiatory gift for us. <And> he stayed there. When owing to our association with him many well-disposed monks arrived again, ...'

(4): Skt.: *ayam eko 'smākaṃ dakṣiṇāṃ śodhayiṣyatīti* '<for> he alone will get an expiatory gift for us' との対応に 'food' への言及が見られない点及び Toch.B *śeśuwer* が 'food' の意味で使用される例が管見の限り見られない点を考慮すれば、ここに在証される Toch.B *śeśuwer* は Peyrot (2013: 661) にある 'food' ではなく、'eating' を意味する動名詞であると考えられる。

b2-b4: Skt. *taiṣa tato 'pi vayaṃ nirvāsītāḥ tato 'smābhir jātāmarṣaiḥ śuṣkāni kāṣṭhāni tṛṇāni gomayāni upasaṃhṛtya sarvavihāra ādīpitaḥ tatra ca bahavaḥ śaikṣāśaikṣā bhikṣavo dagdhāḥ te ca vayaṃ tasya karmaṇo vipākena pratyeṅkarake upaṇnāḥ* 'we were expelled by them from there (once more). Thereupon, we angrily set the whole monastery on fire after gathering dry wood, grass, <and> cow-dung, and many monks to be trained and no longer to be trained <were> burnt in it; and <so> we ourselves <were> born in the Pratyekanaraka owing to the maturation of this act.'

(5): この箇所にものみ在証される Toch.B *weś* について、*TochSprR(B)* II: 288, fn. 6 は一人称代名詞複数の向格 *wesās* への修正を提示するが、上記サンスクリットのパラレルにおいて Toch.B *weś* は Skt. *kāṣṭha-* 'a piece of wood, stick' (*MW*: 281a) 或いは *tṛṇa-* 'grass, herb' (op.cit.: 453a) に対応している可能性があり、この対応が正しいとするならば、Sogd. *wyš* 'herb, plant' (Gharib 1995: 426a) が示すように、この語はイラン語からの借用語であるかも知れない。

2-2-2. 内容比定

前節で転写及び和訳を与えた B431 に対応する内容を含むものとして、筆者が知り得た限りでは以下の文献を挙げる事ができる。

『因縁僧護經』 (T.17, no. 749, 565c-572b)

Mūlasarvāstivādinaya: Pravrajyāvastu (Vogel and Wille 1996)¹⁰

Divyāvādāna Ch.23: *Samgharakṣitāvādāna* (Vaidya 1959a: 205-212)

Bodhisattvāvādānakalpalatā Ch. 67: *Samgharakṣitāvādāna* (Vaidya 1959b: 428-433)

これらの文献の内、《*Divyāvādāna*》第23章: *Samgharakṣitāvādāna* は《*Mūlasarvāstivādinaya*》の《*Pravrajyāvastu*》に在証されるものの簡略版である事が、Bailey (1950: 166) によって指摘されている¹¹。一方、《*Bodhisattvāvādānakalpalatā*》第67章: *Samgharakṣitāvādāna* に見られる B431a2-b4

いない。なお、小田 (1987: 82) は古代ウイグル語の *śīlavanti* について検討した際、本稿で扱っているベゼクリク第20窟のプラーフミー文字題記に見える *śīla vānde* との関係を示唆している。

¹⁰ 若干の相違が見られるものの、このサンスクリット文献については漢訳『根本説一切有部毘奈耶出家事』(T.23, no. 1444, 1035b-1041a) 及びチベット語訳も伝わっている。なお、チベット語訳については Vogel and Wille (1996) で利用されており、参考文献については両氏の研究を参照されたい。

¹¹ 《*Divyāvādāna*》第23章については、Burnouf (1876: 280-299) 及び Panglung (1981: 8-9) を参照。

に関連する部分は基本的に《Pravrajyāvastu》のものと一致しているが、詳細は語られない。そのため、上記の文献の内、《Pravrajyāvastu》と異なるテキストを示すものは漢訳『因縁僧護經』のみである。この漢訳は東晋(317-420)の頃に成立したとされるが、訳者は不明である。以下に言及するように、B431 で語られている内容について『因縁僧護經』は《Pravrajyāvastu》と重要な点でいくつか異なる記述を示すが、B431a2-b4 の解釈に際しては《Pravrajyāvastu》も重要であり、それに先行する a1-2 については『因縁僧護經』を参照する事でのみ解釈する事ができる。

トカラ語 B 断片 B431 の内容は、主人公 *Saṅgharaksita* に仏陀が与えた、彼が仏陀へ赴く途次で見た寺院に住する僧侶達の宿業に関する説明で構成されていると推定される点で、4-5 世紀に漢訳された『因縁僧護經』と類似しているが、この B431 と一致するテキストは、現在知られている《*Saṅgharaksitāvadāna*》には見出されない点は特筆に値する。また、この事実は、トカラ語 B のテキストが現在は失われたインド語原典から翻訳された事を示唆すると同時に、クチャ地域では、現在知られているテキストとは異なる『因縁僧護經』のテキストが流通していた事を示している。

[1]: B431a1-2 のパラレル

《Pravrajyāvastu》では、主人公 *Saṅgharaksita* が仏陀の下に赴く途次、三つの寺院を見るが、『因縁僧護經』では六つとなっている。彼はこれらの寺院で、宿業の相違によって異なる苦しみを楽しんでいる僧侶達を目撃し、仏陀の下に到着した後、苦しみの原因となった宿業について仏陀から説明を受ける。B431a1-2 は、『因縁僧護經』で語られる物語の内、*Saṅgharaksita* が見た五番目の寺院に住する僧侶達の宿業に関連すると考えられるが¹²、この部分はその他のテキストには見られない。以下に『因縁僧護經』に見られる対応部分を引用する。

「汝見第五寺者。非是僧寺。亦非比丘。是地獄人。迦葉佛時。是出家人。臨中食上。不如法食。惡口相罵。以是因縁。受鐵床苦。諸食器中。沸火漫流。筋肉消盡骨如焦炷。從迦葉佛涅槃以來。至今不息。」
(T.17, no. 749, 568c7-12)

[2]: B431a2-b4 のパラレル

B431a2-b4 に対応する部分は『因縁僧護經』及び《Pravrajyāvastu》の双方に見られ、内容は基本的に一致する。まず、『因縁僧護經』に見られる対応部分を引用する。

「汝見第三寺者。非是僧寺。亦非比丘。是地獄人。迦葉佛時。是出家人。懈怠比丘。多人共住。共相謂言。我等今者。可共請一持律比丘。共作法事。可得如法。即時推覓。得一淨行比丘。共

¹² *Saṅgharaksita* の到着後、仏陀が彼に与えた説明では、この部分は五番目の寺院に住する僧侶達の宿業であるが、*Saṅgharaksita* が仏陀の下へと赴く物語では六番目の寺院となっており、トカラ語 B 断片 B431a2 にある//6//と一致する。このように、『因縁僧護經』には物語と仏陀による説明との間に順序の不一致が認められる。なお、その他のテキストでは、仏陀は *Saṅgharaksita* に対して、これらの寺院に住する僧侶達の宿業に関する説明を与えず、それぞれの寺院に住する僧侶自身による説明となっている

住食宿。此淨行比丘。復更推覓同行比丘。時淨行人。轉轉增多。即便追逐。令出寺外。時破戒人。於夜分中。以火燒寺。滅諸比丘。以是因緣。手捉鐵鎚。互相摧滅。從迦葉佛涅槃以來。受大苦惱。至今不息。」
(T.17, no. 749, 568b21-c1)

Gilgit 近郊で発見されたサンスクリット写本に含まれる B431a2-b4 に対応するパラレルは、Vogel and Wille (1996) で出版されている。以下では、このサンスクリットのテキストと英訳を Vogel and Wille (op.cit.: 255-256, 276-278) から引用する¹³。引用部分に先行する部分において、食事時に座に就くと、寺院諸共炎に焼かれてしまう僧侶達を *Samgharakṣita* は目撃する。引用部分はそれに続く、僧侶自身によって *Samgharakṣita* に為された説明である。

sa kathayaty ahaṃ pratyakṣadarśy eva kathaṃ na śraddhāsyaṃ | te kathayanti bhadanta samgharakṣita vayaṃ kāśyapasya samyaksambuddhasya śrāvakā āsan duṣṣilāḥ pāpadharmāṇas te vayaṃ śīlavadbhir bhikṣubhir vihārān niṣkāsitāḥ tair asmābhiḥ śūnyavihāra āvāsito

yāvat tatraiko paribhramaṃ śīlavān bhikṣur āgataḥ tato 'smākaṃ buddhir utpannā tiṣṭhatv ayam eko 'smākaṃ dakṣiṇāṃ śodhayiṣyatī | sa tatraivāvasthito yāvat tasyānuṣaṅgena punar api bahavo bhikṣavaḥ śīlavanto 'bhyāgatāḥ tais tato 'pi vayaṃ nirvāsītās

tato 'smābhir jātamarṣaiḥ śuṣkāṇi kāṣṭhāni trṇāni gomayāny upasaṃhrītya sarvavihāra ādīpitaḥ tatra ca bahavaḥ śaikṣāśaikṣā bhikṣavo dagdhās te ca vayaṃ tasya karmaṇo vipākena pratyekanarake upapannāḥ sthānam etad vidyate yad <asmākaṃ> itaś cyutānāṃ narake upapattir bhaviṣyati | tat sādhu bhadanta samgharakṣita jambūdvīpaṃ gatvā sabrahmacāriṇāṃ etam arthaṃ vistareṇārocaya | mā yūyam āyusmantas sabrahmacāriṇāṃ antike duṣṭaṃ cittaṃ utpādayiṣyatha mā tādrśasya duḥkhasamūhasya bhāgino bhaviṣyatha tadyathā śramaṇās śākyaputrīyā iti | sa tatheti pratijñāya samprasthitaḥ |

He said: “<When> I saw (it) with my very own eyes, how should I not believe (it)?” They said: “Venerable Samgharakṣita! We were disciples of Kāśyapa, the perfectly enlightened one. <When we had become> ill-disposed <and> ill-conducted, we ourselves <were> ejected from our monastery by well-disposed monks, <whereupon> we ourselves resided in an empty monastery.

“When a well-disposed monk arrived there on his lone journey, then (this) idea occurred to us: ‘He shall <be pleased to> stay! <For> he alone will get an expiatory gift for us.’ <And> he stayed there. When owing to our association with him many well-disposed monks arrived again, we were expelled by them from there (once more).

¹³ 『因縁僧護經』において、この部分は仏陀による説明の内、三番目の寺院に住する僧侶達の宿業として語られるが、*Samgharakṣita* が仏陀の下へと赴く物語では五番目の寺院となっている。ここで引用するサンスクリットは、*Samgharakṣita* が目撃した三番目の寺院に住する僧侶達についての部分であり、B431a2-b4 に対応する部分は太字で示している。

“Thereupon we angrily set the whole monastery on fire after gathering dry wood, grass, <and> cow-dung, and many monks to be trained and no longer to be trained <were> burnt in it; and <so> we ourselves <were> born in the Pratyekanaraka owing to the maturation of this act, <and> there is a fair possibility that (another) birth in hell will be (in store) for us when we have passed away from here. Therefore please, venerable Samgharakṣita, having gone to Jambudvīpa, tell your fellow-students this matter in detail, (asking them:) ‘Reverend sirs! You shall not cause evil-mindedness among your fellow-students, you shall not become possessed of such a mass of misery, as for instance the mendicants of Śākyaputra!’” He promised <to do> so and set out.”

[3]: B431b4 のパラレル

B431b4 には *k,ce cew nano sankrā(mne)* 「(汝が)その寺院の中で(見た)人々 [...]」とあり、八番目の寺院が語られていた事を示唆するが、この部分で断片が終わっているため、対応するパラレルは得られない。

2-3. ベゼクリク第20窟誓願図第5面のブラーフミー文字題記の解釈

前節で検討した B431 の内容比定により、ベゼクリク第20窟誓願図第5面のブラーフミー文字題記に在証される *śilavānde* が、中期インド語を媒介とした Skt. *śilavat-* ‘well-conducted’ の借用語である事が明らかになった。この結果、当該題記 *śilasānte śilavānde* は「持律比丘 *Śilasānte*」と解釈する事ができると同時に、この題記は従来推定されていたようなサンスクリットではなく、トカラ語 B によって解釈される事も明らかになった¹⁴。ただし、この題記に見られる二つの借用語は、サンスクリットの *-a* 語幹名詞に対して *-e* を充てており、語末形式からトカラ語 B のものと考えられるが、トカラ語 A にもこの種の借用語が見られ、この題記のみではトカラ語 A 或いはトカラ語 B いずれによるものかを確定できないため、ここではトカラ語としておきたい¹⁵。先に言及したように、この石窟の回廊に描かれた誓願図に附されたブラーフミー文字題記は全てサンスクリットで書かれたものであったため、この第5面のトカラ語題記の存在は特に注目に値する。

この題記がトカラ語によるとする筆者の解釈が正しいならば、この題記はトゥルフアンで発

¹⁴ なお、謝辞で言及した発表当日頂いたコメントで、吉田豊教授(京都大学)より、古代ウイグル語の語末母音の *-i* はブラーフミー文字では *-e* でも表記されるため、この題記は必ずしもトカラ語ではなく、古代ウイグル語の可能性もあるとのご指摘を頂いた。しかしながら、ベゼクリク第20窟に書かれた古代ウイグル語の題記は全てウイグル文字によって書かれており、ブラーフミー文字による古代ウイグル語の題記は見られない事、また、これまでに知られている古代ウイグル語 *śilavanti / śilavanti* は語末に *-i* を伴う語形のみが知られており、*-e* を示す語形は在証されていない事から、筆者はトカラ語で書かれた可能性を主張したい。ただし、この問題の解決は、トカラ語 *śilavānde* 及び古代ウイグル語 *śilavanti / śilavanti* の在証例が今後より多く発見される事に期待せざるを得ない。

¹⁵ この題記を構成する *śilasānte* と *śilavānde* は共に *-nt-* というインド語の子音連続に遡る *-nt-* 及び *-nd-* を有するが、前者は *-nt-* を保存する一方、後者は *-nd-* と有声音化している。この相違は、前者がサンスクリットの *śānta-* に由来するため、*-nt-* という正書法を保ちやすいのに対し、後者は俗語における類推によって成立した新しい語形としてトカラ語に借用されたため、正書法による影響を受けにくく、有声音間の無声閉鎖音が有声音化するというトカラ語の形態音韻論とも相俟って、有声音化した語形が正書法として定着した事に起因すると考えられる。

見された壁画に附された題記としては最初のトカラ語題記であり、同時にベゼクリク第20窟にこれらの誓願図が描かれたと推定される11-12世紀頃のウイグル仏教において、少なくとも仏教言語としてトカラ語が依然として使用されていた事を示唆する。この題記は、トカラ語使用の下限年代の決定に重要な手がかりを与えるものである¹⁶。また、ベゼクリク第20窟誓願図が(根本)説一切有部系のトカラ仏教の影響であるとする点は既に指摘されているが¹⁷、このトカラ語題記の存在は、壁画の主題だけでなく、言語の面からもこの推定を支持すると言えよう。

3. 壁画資料に見えるトカラ仏教とウイグル仏教

前節ではベゼクリク第20窟の誓願図にトカラ語題記が書かれている事を論じた。この結果、トカラ仏教とウイグル仏教との関係を示す新しい資料を得る事ができた。トカラ仏教とウイグル仏教の関係を示す資料は言語学・文献学及び歴史学研究から指摘されているが¹⁸、仏教美術研究から提出された資料としては、ベゼクリク及びクチャの各石窟寺院に描かれた誓願図に基づいた議論が中心である¹⁹。本節では、トカラ仏教とウイグル仏教の関係について論じる際、これまで扱われる事のなかった新しい美術資料を提示すると共に、古代ウイグル語の影響を示すトカラ語B題記を紹介し、両言語間に起きた言語接触の問題について検討したい。

[A]: ベゼクリク第20窟誓願図第5面の比丘像

前節で検討したベゼクリク第20窟誓願図第5面にはトカラ語題記が確認されたが、この題記が附されている比丘はトカラ仏僧ではなく、ウイグル仏僧の姿に見える旨、森安孝夫大阪大学名誉教授よりご教示頂いた²⁰。この僧侶がウイグル人であれば、11-12世紀頃のウイグル仏教において、トカラ語を使用するウイグル僧侶が存在していた事を示す事になり、誓願図という主題やこの僧侶に附されたトカラ語題記だけでなく、題記を附された僧侶そのものがウイグル仏教との関係を示すものと見做す事ができる。特に注目すべきは、ベゼクリク第20窟の誓願図の内、壁画の内容を説明するため誓願図上部に附されたサンスクリット題記以外に、これらの誓願図に書かれた題記は、このトカラ語題記が唯一のものであるという点である。この題記を附された僧侶が、当時のウイグル仏教でどのような地位を占めていたか、またどのような理由でこの誓願図に描かれるに至ったのかを確定する事はできないが、誓願図の作成に重要な役割を

¹⁶ Tamai (2011: 374-375) によれば、注3で言及したベゼクリク石窟発見とされるドイツ所蔵トカラ語A断片A384(=THT1018)に対する放射性炭素(C14)年代測定法の結果はA.D. 938-997となっている。

¹⁷ トカラ語仏典の部派帰属については既に複数の研究が存在しており、(根本)説一切有部に属する事が明らかになっている。この問題に関する最新の議論としてはOgihara (2015b)を参照。なお、ベゼクリク第20窟誓願図第9面及び第10面のサンスクリット題記と共通する内容を示すトカラ語B断片については、荻原(2016)を参照。

¹⁸ 言語学研究としては庄垣内(1978)を、歴史学研究としては森安(1989, 2007)を、また文献学の観点からの研究は枚挙に暇がないが、差し当たりKasai et al. (2013)所収の諸論考を参照。なお、本稿で引用する森安論文は森安(2015)にも再録されているが、著者による新たな注釈が追加されており、両者共に参照されたい。

¹⁹ 橘堂(2013)及び森(2015)を参照。なお、Wilkens (2015: 209-213)は誓願図以外の美術資料についても言及しているが、トカラ仏教とウイグル仏教の関係についての詳細な議論は見られない。

²⁰ なお、橘堂(2013)は、同じくベゼクリク第20窟に描かれた、従来「インド僧」と見做されてきた僧侶図がトカラ仏教圏の僧侶を描いたものである事を指摘している。

果たした僧侶であった事は確かであろう²¹。

[B]: ショルチュク発見の仏教壁画

筆者は、拙稿 (Ogihara 2014: 120-121) で、エルミタージュ美術館に収蔵され、現在は展示に供されているショルチュク発見の壁画に附されたブラーフミー文字題記を出版した。この壁画には二つのブラーフミー文字題記が書かれているが、以下に引用するように、その内の一つはトカラ語 A で書かれていた事を明らかにした²²。トカラ語 A によって書かれた題記はこれまで知られておらず、これがトカラ語 A によって書かれたと確定された最初の題記である²³。

[Transliteration]

/// [h]w - kalytra || sas śrāddhe se (·)m r ||

[Transcription]

/// [h]w - kālytrā || sās śrāddhe Se(r)m(er) ||

[和訳]

[...] がある。これは信者の *Sirmir* (?) である。

この題記は壁画に描かれた寄進者像に対して附されたものと考えられる事から、題記の末尾には人名が書かれていたと推定され、ここでは原語不明の漢人名として古代ウイグル語文献に在証される *Sirmir* に対応する形式を推定した。前掲拙稿でも言及したように、この壁画の年代はエルミタージュ美術館の解説では、疑問符付きではあるが、7 世紀と推定されている。しかしながら、筆者は壁画に描かれた人物の様式とトカラ語 A による題記の存在から、これらの寄進者像はトカラ語話者ではなく、漢人或いはウイグル人であり、7 世紀では早過ぎるのではないかという疑問を呈しておいた。

その後、関係資料を確認している内に、同じくショルチュクで発見された壁画がこの寄進者像の年代確定に重要な手がかりを与える事に気付いた。その壁画はドイツ探検隊によってショルチュクで発見され、後に Le Coq and Waldschmidt (1933: 60, Tafel 25) で出版されたものである。この壁画には男女五人ずつ合計十人の人物が描かれており、図版に対する解説ではこれらの人物はウイグル人であるとされている。この壁画に描かれた男性の様相は、筆者が上記拙稿で紹

²¹ 同じくベゼクリク第 20 窟誓願図第 9 面 (Le Coq 1913: Tafel 25) 及び第 10 面 (op. cit.: Tafel 26) の向かって右下にも、その他の人物と較べて非常に小さく描かれた人物が見られるが、題記は附されていない。

²² もう一方の題記は損傷により内容・言語共に確定できないが、サンスクリットでない事は確実である。もう一方の題記がトカラ語 A である事から、こちらもトカラ語 A であった可能性がある。

²³ その後、ショルチュク発見とされるエルミタージュ美術館所蔵の別の仏教壁画にもトカラ語 A の題記が書かれている事が明らかになった。この題記については荻原 (2015c: 38-39) を参照。なお、前掲拙稿で論じたように、トカラ語 A には世俗文書も知られており、Peyrot (2010) に代表されるようなトカラ語 A は宗教言語として用いられた文語であったという従来の説は否定され、少なくとも唐朝支配下にあった 8 世紀頃にはショルチュク地域で流通していた言語であったと考えるべきである。ただし、トカラ語 A の口語としての使用の下限年代については不明である。この二つの題記の図版としては、エルミタージュ博物館・西北民族大学 (2011: 346-349, 353-355; 図版 20, 27) を参照。

介した題記が附された人物のものとも一致している事から、エルミタージュ美術館所蔵の壁画の人物もウイグル人であったと考えられるため²⁴、トカラ語 A 題記が書かれた当該の壁画の年代は7世紀ではあり得ず、マニ教徒であったウイグル人が仏教に改宗した後という事になり、上限年代は早くても10世紀後半という事になる²⁵。この年代決定により、ウイグル仏教においてトカラ語 A はシオルチュク地域では10世紀後半或いは11世紀前半頃まで少なくとも宗教言語として重視され、使用されていた事が窺える。

[C]: クムトラ石窟窟群区第79窟の寄進者像²⁶

クチャのクムトラ石窟窟群区第79窟は1982年に発見された石窟であり、20世紀初頭にこの地を訪れた探検隊の記録には存在しない。この石窟の壇基正面と主室前壁窟門左側に漢語及び古代ウイグル語を伴ったブラーフミー文字題記が書かれていた事が報告されているが²⁷、現在は主室前壁窟門左側の壁画が崩れてしまい、ブラーフミー文字が書かれていた部分は全て失われ、また壇基正面の壁画についてもブラーフミー文字が一部損傷を受けている。以下に示す当該題記の解釈は、既公表の図版の内、古いものを利用して解読したものである²⁸。筆者の調査の結果、両者ともトカラ語 B による題記である事が明らかになったが、トカラ語 B による題記を伴ったウイグル人寄進者が描かれるのは歴史的背景から考えて10世紀後半であると推定される。これまでクチャ地域におけるトカラ語 B 使用の下限年代は不明であったが²⁹、これらの題記は、クチャ地域においてトカラ語 B が10世紀後半まで使用されていた事を示す貴重な資料である。なお、クチャ地域では石窟の寄進者像に附されたブラーフミー文字題記にはサンスクリットが使用されるのが通例であり、トカラ語 B によって書かれたものは管見の限り知られていない。この点からも、10世紀後半においてもクチャ地域の仏教でトカラ語 B が重視されていた事が窺えると共に、この石窟の寄進者像がトカラ語 B 及びサンスクリットを中心とした伝統的なクチャ仏教とは異なる背景を有する事が確認される。

²⁴ クチャのシムシム石窟第44窟にも、この壁画の人物と同様に黒い帽子を被った人物が描かれており、研究者によってウイグル人に比定されている事を森美智代氏からご教示頂いた。ここに記して、篤くお礼申し上げます。なお、このシムシム石窟の壁画については、森 (2015: 24) を参照。

²⁵ ウイグル人が仏教に改宗した年代には諸説あるが、筆者は早くても10世紀後半以降とする森安 (1989, 2007) に従っている。なお、歴史的背景を考慮すると、この壁画は10世紀後半ではなく、むしろ11世紀と考えるべきである旨、森安教授からご教示頂いた。ここに記して、篤くお礼申し上げます。

²⁶ ここで扱う二つの題記については、本稿冒頭謝辞で言及した筆者の発表とその後に行われた当該題記をめぐるメールでの議論に基づいている。議論でご返信頂いた松井教授(大阪大学)・辛嶋志志教授(創価大学国際仏教学高等研究所)・森安教授の諸氏に深く感謝申し上げます。

²⁷ 漢語部分の解読については梁・丁 (1985: 5)、馬 (1985: 232-233) 及び荘 (1986: 77-78) を、また古代ウイグル語部分については吉田 (1990: 67-68) 及び Zieme (2013: 9 及び 23) を参照。なお、Zieme 論文には王丁による漢語部分の再読が引用されている。この古代ウイグル語部分の解読として Zieme 論文の存在をご教示頂いた橋堂晃一博士に篤くお礼申し上げます。

²⁸ この石窟の題記の古い図版を書誌情報と共にご提供頂いた中川原育子博士には、心よりお礼申し上げます。なお、解読に際しては新疆ウイグル自治区文物管理委員会・庫車県文物保管所 (1985: 図版 183) 及び新疆維吾爾自治区博物館・新疆人民出版社 (1997: 図版 115) を利用した。

²⁹ クチャで発見されたトカラ語 B 資料から帰納される年代については、慶 (2013) を参照。その年代論によれば、下限年代は9世紀初頭までしか遡る事ができない。

(1): 壇基正面

ここには六人の僧侶と子供が一人描かれており、漢語・ブラーフミー文字・古代ウイグル語で人名が書かれている。この内、漢語及び古代ウイグル語部分については、既に解説が為されているが、ブラーフミー文字によって書かれた題記は、漠然とトカラ語 B であるという事が推定されているだけで、これまで具体的な解説は提出された事がなかった。このブラーフミー文字題記の下には漢人僧侶が描かれており、側には漢語で「法行律師」と書かれている。このブラーフミー文字題記はこの僧侶に対して附されたものと考えられる。なお、漢人僧侶に対してトカラ語 B による題記が附された例はこの他には見られず、ウイグル仏教がトカラ仏教と漢人仏教に基づいて発展したとする所謂「トカラ仮説」で仮定される状況を反映していると言える。以下に転写と和訳を挙げる。

[Transliteration]

se [ma]hāpunyēs[ī]li hwyā[p] hi[ts]e mo -///

[Transcription]

se [ma]hāpunyēs[ī]li⁽¹⁾ hwyā[p] hi(m)[ts]e⁽²⁾ mo⁽³⁾ -///

[注釈]

- (1): 漢語「法行律師」を考慮すると、漢語「律師」に対応する語と見られるが、Skt. *mahāpunyaśīla-*「偉大なる徳を有する」の借用語となっている。なお、前節で検討した ToCh.B *śilavānde* に由来すると見られる古代ウイグル語 *śilavanti* は漢語「律師」に対応する事が知られている³⁰。仏教学では「律(Skt. *vinaya-*)」と「戒(Skt. *śīla-*)」は厳密に区別され、後者を後分とする複合語の訳語として「律師」は不適当という議論があり得るが、この題記に見える対応から、漢語「律師」に対応する原語として Skt. *vinayadhara-* ‘one who has mastered and knows the Vinaya’ (BHS: 489a) を想定する必要はなく、ウイグル仏教では Skt. *śilavat-* ‘well-conducted’ を含め、「高德の」を表すサンスクリット或いはトカラ語の肩書を漢語「律師」に対応させて理解していたと推定される。これには、当時西域北道で行われていた漢人仏教の影響も考えられるが、具体的な検討はウイグル仏教の専門家に委ねたい³¹。
- (2): 漢語「法行」(LMC: *fjyap/fa:p xhja:jn*) の音写 *hwyāp hi(m)** にトカラ語 B の単数属格語尾 *-ntse* が付加された形式であると考えられる³²。また、「法」の声母は幫母であるが、ここでは唐代漢語西北方言に見られる軽唇音化した音価を示している。なお、後続する *hi(m)[ts]e* については鼻音の有無を確定できないが、唐代漢語西北方言では末尾子音 *-ŋ* が脱落し、さらに

³⁰ モンゴル時代大都の普慶寺に関する古代ウイグル語仏典の識語と『佛祖歴代通載』の記事との比較に基づいて、この対応を最初に指摘したのは小田 (1987: 81-82) である。この点につきご教示頂いた松井教授に感謝申し上げます。なお、ウイグル仏教では古代ウイグル語の *śilavanti* という肩書を持った人物が必ずしも高位の僧侶であるとは限らない点、森安・松井両教授よりご教示頂いた。

³¹ 「律師」という称号がクムトラの漢人仏教教団で知られていた事は、同地から出土した 8 世紀前半に遡る壁面銘文に「律師」という称号が見られる事から確実である。この漢文銘文については、森安 (2007: 21) を参照。

³² 以下、本節では中古音 (LMC = Late Middle Chinese) として Pulleyblank (1991) のものを利用した。

は Late/Colloquial Tocharian B でも属格語尾の鼻音が脱落する例が見られるため、鼻音がなくても対応に問題はない³³。

(3): Skt. *mokṣa*-といったような、「法行律師」の隣の人物の人名の冒頭部分であると考えられる。

[和訳]

これは、偉大なる徳を有する法行の(図像である)。[...]

(2): 主室前壁窟門左側

この壁画には男女がそれぞれ二人ずつと子供が一人描かれている。図版では破損が見られるが、当初は全ての人物に漢語と古代ウイグル語の題記がそれぞれの人物の横に書かれており、さらに壁画の上部にはブラーフミー文字による題記が附されていたと考えられる。この題記についても漢語及び古代ウイグル語部分は既に解説が為されているが、ブラーフミー文字によって書かれた題記は、漠然とトカラ語 B であるという事が推定されているだけで、今まで具体的な解説は提出されていない。解説の結果、ブラーフミー文字題記は壁画に描かれた人物に対して附されたものである事が明らかになったが、壁画上部の損傷により三人のものしか残っていない。以下に転写と和訳を挙げる。

[Transliteration]

/// y· pyai eṅku s[tm]au [s]te [dāna]pa[t]iyya e_l | sli_k | hkuñcu_y^β | a[ra]ñciṣṣ[e]
pr· [ce]r_l tirrak_l bh[a]ki⁽¹⁾ c· r_l | s· n[phu]⁽²⁾ e_l hk· ñcu[y]

[Transcription]

/// (p)(ā)pyai eṅku s[tm]au [s]te [dāna]pa[t]iyya⁽³⁾ el sli_k hkuñcu_y⁽⁴⁾ | a[ra]ñciṣṣ[e]⁽⁵⁾
pr(o)[ce]r tirrak⁽⁶⁾ bh[a]ki c(o)r | s(i)n[phu]⁽⁷⁾ el hk(u)ñcu[y]⁽⁴⁾ |

[注釈]

- (1): <bha>の上には母音付加記号の<ā>のような stroke が見えるが、一般の<ā>とは異なるため、ここでは<bha>と解釈した。
- (2): 二つ目の *akṣara* は或いは *n[hu]* とすべきかも知れないが、以下に述べるようにこの部分は漢語「新婦」に対応すると考えられ、「婦」と同一声母の並母を有する漢字が、コータン語表記に使用されるブラーフミー文字資料では<ph>で音写される事から *n[phu]*の方が妥当であると考えられる³⁴。
- (3): 新出語形であるが、中期インド語を媒介とした Skt. *dānapati*- ‘a liberal donor’の借用語と推定される *danapati**に、女性名詞を派生する接尾辞-*ya* が附されたものと解釈した。ただし、最初の2 *akṣara* は確定しにくく、或いは *[tanā]pa[t]iyya* とする可能性も完全には排除できない

³³ この題記に在証される *hwāp hi**は漢語「法行」に由来するが、実際にはウイグル漢字音 *fabxi* (或いは *vapxi*) を反映しており、この推定が正しいならば、<hi>に対して *anusvāra* を補う必要はないのではないかとのご指摘を松井教授より頂いた。なお、この二文字のウイグル漢字音については、庄垣内 (2003: 131, 135) を参照。

³⁴ コータン語資料中における並母との対応については、Emmerick and Pulleyblank (1993: 24) を参照。

いが、その場合の語幹は Toch.B *tanāpate* ‘patron’ と解釈される。

- (4): Toch.B *hkuñcuγ* は初出だが、漢語「公主」に由来する Uyg. *kunčuy* の借用語であると考えられ、漢文題記「公主」及び古代ウイグル語題記 *kunčuy* に対応する。
- (5): Toch.B *arañcišše* は *arañce* ‘heart’ から派生した属性を表す形容詞とされるが、ここでは「親愛なる」と解釈した。
- (6): Zieme (2012: 9, 23) はこの人物に附された古代ウイグル語題記の人名を *toy bägi čor* とするが、トカラ語題記及び古代ウイグル語題記の向かって左側の漢文題記「同生阿^阿^弥希^希噶^噶帝^帝嚙^嚙」からは支持されず³⁵、ウイグル人名・称号として在証される *tiräk* とすべきである。この場合、Toch.B *tirrak bh[a]ki c(o)r* は Uyg. *tiräk bägi čor* に再構でき、Toch.B *a[ra]ñcišš[e] pr(o)[ce]jr tirrak bh[a]ki c(o)r* でウイグル文字題記 *ičimiz tiräk bägi čor* 「私達の兄，柱国たるベギ=チョル」と正しく対応する。また、このウイグル語再構形は、漢文題記の翻訳・音写にも適合する³⁶。
- (7): 漢語「新婦」(LMC: *sin fhjyw'ffiuw'*) の音写と考えられる。なお、「婦」の声母である並母は中古音に推定される両唇有声閉鎖音ではない事が窺える事から、壇基正面の題記に見える「法」と同様に、唐代漢語西北方言の特徴を示している。

[和訳]

[...] 花を持ち佇んだ(或いは「佇んでいる」) 供養者エル=シリッグ公主³⁷ | 親愛なる兄弟、柱国たるベギ=チョル | 新婦エル公主
(頡里思力公主 *el silig kunčuy* | 同生阿^阿^弥希^希噶^噶帝^帝嚙^嚙 *ičimiz tiräk bägi čor* | 新婦頡里公主 *el kunčuy*)

この題記で特に注目すべきは、冒頭の[...] (*p*)*y(ā)pyai enku s[tm]au [s]te [dāna]pa[t]iyya el slik hkuñcuγ* 「[...] 花を持ち佇んだ(或いは「佇んでいる」) 供養者エル=シリッグ公主」である。壁画との対応から、この箇所が言及する人物は女性である事が明らかであるが、トカラ語 B の文法から見て、名詞を修飾する部分は破格である。即ち、トカラ語 B には性の区別があり、過去分詞が名詞を修飾する場合は名詞の性に一致しなければならず、ここでは *[dāna]pa[t]iyya el slik hkuñcuγ* を修飾する *enku* 及び *s[tm]au* はそれぞれ女性形単数主格の *enkusa* 及び *s[tm]ausa* である事が期待される。また、この二つの過去分詞に後続する *ste* は *copula* の単数現在形であるが、

³⁵ 漢文題記は慶昭蓉博士に再読頂いた。ここに特に記して、篤くお礼申し上げる。この題記は注 27 で引用した先行研究で取り上げられているが、それぞれ録文は異なっている。ここでの新たな修正箇所は「希」の部分であり、その他の部分については上記先行研究のいずれかで提出されている。なお、同氏よりは古代ウイグル語題記中の *tiräk* の解説でも重要な示唆を頂いた。

³⁶ この修正は松井教授によりウイグル文字の読みとして問題ないとの旨、ご教示頂くと共に、*tiräk* に関する参考文献として Zieme (1977: 153) 及び森安 (1991: 191) をご教示頂いた。また、漢文と古代ウイグル語・トカラ語 B で *tiräk* の位置が異なるのは、この語が人名ではなく、漢語「柱国」にあたる称号であるからではないかと松井教授よりご指摘頂いた。ここでのトカラ語 B 題記の和訳では、この解釈を採用している。特に記して、篤くお礼申し上げる。なお、漢語「柱国」にあたる称号としての *tiräk* については、森安 (op.cit.) を参照。

³⁷ 下に引用するように、漢文・古代ウイグル語題記には一人目の「花を持ち佇んだ(或いは「佇んでいる」) 供養者」に対応する部分は見られないが、古代ウイグル語題記の三人目が「新婦」を欠いている点を除き、その他の部分はトカラ語 B 題記の内容と一致している。

トカラ語 B では過去分詞に *copula* が後続する要素によって名詞が修飾される例は、管見の限り知られていない。上記の和訳で「花を持ち佇んだ(或いは「佇んでいる」)」とした修飾句としては、一般的には動詞の現在中受動分詞或いは過去分詞の使用が期待される。

筆者には、このような修飾句の形成が、古代ウイグル語の影響を考慮する事で説明できるように思われる。即ち、古代ウイグル語には定動詞の完了形と完了分詞の双方の機能を有する *-mİs* という接辞が存在し、この接辞を附された形式に *copula* の *är-* が後続すると、過去を表す用法が知られている³⁸。また、古代ウイグル語からの影響を受けたと考えられているソグド語には、*copula* の三人称単数過去形 (*w)mİt* が、直接名詞を修飾する用例が在証されており、古代ウイグル語の *copula* の *är-* がこの接辞を伴った形式 *ärmiš* に対応すると考えられている³⁹。筆者は、この題記に見られる過去分詞と *copula* によって形成された名詞修飾句は、このような古代ウイグル語の用法の影響ではないかと考えている。

このような推定は、この題記を書くために使用されているブラーフミー文字からも裏付けられる。即ち、ここで使用されているブラーフミー文字は非常に特徴があり、西域北道で発見されるトカラ語やサンスクリット写本に一般的に使用される字体ではなく、ブラーフミー文字表記の古代ウイグル語写本及びウイグル文字表記の古代ウイグル語写本中に挿入されるブラーフミー文字で記されたサンスクリット部分に顕著に見られる字体で書かれている⁴⁰。筆者が把握している限りでは、このような字体で書写されたトカラ語断片は B294, B296-297, U5207-5208 などといった断片で、極少数しか確認されていない。しかも、これらの断片はいずれもトゥルフアンで発見されたものであり、言語特徴は Late/Colloquial Tocharian B に分類され、加えて B296-297 は写本の形状が古代ウイグル語写本に使用される形状をしている事から、明らかにウイグル仏教との関連を示すものである。また、U5207-5208 はトカラ語 B と古代ウイグル語によるバイリンガルの文書である⁴¹。この事実は、クムトラ石窟窟群区第 79 窟主室前壁窟門左側に書かれたトカラ語 B の題記が、主にウイグル仏教で使用されたブラーフミー文字で書かれている事を示唆するものと言えよう⁴²。

なお、クムトラ石窟には古代ウイグル語の影響を受けたと考えられるトカラ語 B 題記がもう一つ存在している。この題記は谷口区第 7 窟左側壁に書かれているが、壁面を伴うものではな

³⁸ 接尾辞 *-mİs* の用法については、Erdal (2004: 268-270) を参照。なお、トカラ語 B では過去分詞に *copula* が後続すると、*copula* の時制によって現在完了或いは過去完了に相当する意味を表すが、このような形式が名詞を修飾する場合は関係詞構文が使用される。

³⁹ 古代ウイグル語からの影響が見られるソグド語は Turco-Sogdian と称されており、本稿に関連する用例については、Yoshida (2009: 578-579) を参照。

⁴⁰ Maue (1996: XVIII-XIX) によると、ここで使用されているブラーフミー文字の字体は、Sander (1968: 182-183, Tafel 29-41) が nordturkistanische Brāhmī, Typ b (Schrifttypus VI, Alphabet u) に分類するものに属している。なお、この字体の年代を Sander (2005) [2009] は 9-14 世紀としている。ただし、この題記に見られる字体は、その中でも草書体のような字体である。

⁴¹ B294 及び U5207-5208 は漢文仏典の紙背を利用した文書であるが、B296-297 は表裏両面にトカラ語 B のテキストが書かれている。なお、B294, 296-297 の写真は IDP 及び ITIFUS で、U5207-5208 は DTA で公開されている。ブラーフミー文字表記の古代ウイグル語写本については、Maue (1996: Tafel 12-23, 25-33, 43, 51-54) を参照。

⁴² ウイグル仏教においてこの種のブラーフミー文字が使用された背景及びこの種のブラーフミー文字を使用していたウイグル仏教集団については、今後の研究が待たれる。

く、この窟を訪れた者がその活動を記念して残したものと考えられる。この題記は現地に現存するものであるが、ペリオ探検隊によって撮影された写真に基づいて Pinault (1987: 179-180; Pl. XCII-2) が既に解説しており、注釈と共に転写が公表されている。ただし、この題記が古代ウイグル語の影響を反映していると見られる点については言及されていない。以下の解釈は、筆者の調査に基づくものであり⁴³、Pinault による解釈に若干修正を加えている。

[Transliteration]

/// [u] - p[ik]ju[ln]je [w]ace - ñ[an]ts· {- - - - - } -⁽¹⁾ {- } (·)[tu]
 (·)s· m[ai] || na[w]· ke di -⁽²⁾ rakšte [ya]śasem ind[r]i (·)[e] ·[p]· [tunt](·)[e]
 śarmtsa tu[n]tse šo[t]r[i] sr[e]⁽³⁾ pa]śś[ā]wa - ||

[Transcription]

/// (s)[u](wa) p[ik]ju[ln]je [w]ace (me)ñ[an]ts(e) {- - - - - } -⁽¹⁾ {- } (·)[tu]
 (·)s· m[ai] || na[w](ā)ke di -⁽²⁾ rakšte [ya]śasem ind[r]i(šk)[e](m)[p](a) [tunt](s)[e]
 śarmtsa tu[n]tse šo[t]r[i] sr[e]⁽³⁾ pa]śś[ā]wa - ||

[注釈]

- (1): この部分には、<ka>の下部或いは母音付加記号の<u>と推定可能な筆跡が見られる。
 (2): この akšara は<va>或いは<wa>と推定する事ができる。
 (3): 筆者の読みが正しければ、この語は hapax であり、文脈からも解釈できない。

[和訳]

[...] (亥)年某月二日 [...] 私が(?) [...] || 私こと、若い僧徒である Divarakšte が Yaśasem 及び Indriške と共にそのためにその記を [...] 守った(?)。

この題記は前半部分の破損がひどく、文脈を完全に理解する事はできないが、最初の文の文末の語が<mai>で終わっている。二つ目の文の文末が paśśāwa という、動詞 pāsk- ‘to protect’の一人称単数過去形能動態である事を参考にすれば、最初の文の文末の<mai>も、動詞は確定できないが、一人称単数過去形中受動態の語尾である可能性が高い(なお、このトカラ語 B 題記には一人称の人称代名詞は見られないが、動詞が一人称の形式を採っているため、和訳では「私」を補っている)。筆者の推定が正しいならば、この題記は一般に見られるトカラ語 B とは異なる重要な言語特徴を示している事となる。即ち、トカラ語 B では、二つ目の文のように主語が固有名詞である場合、その主語と一致する動詞は必ず三人称の形式を採り、一人称が使用される事はない。そのため、この動詞語尾は、この題記がトカラ語を第二言語として学習した者か、或いは古代ウイグル語に精通した者による事を示唆している。

このように考えた場合、この題記を書いた者の言語背景を推定する際に重要なのは、二つ目の文に見える人名、特に Divarakšte 及び Yaśasem である。この人名はそれぞれ Skt. devarakṣita-

⁴³ この題記については、新疆龜茲研究院・北京大学歴史学系中国古代史研究中心・中国人民大学国学院西域歴史語言研究所 (2015: 30-31) で言及した。

及び *yaśasena*-のトカラ語における借用語形であるが、両者とも通常のトカラ語 B 語形ではない。トカラ語 B において Skt. *rakṣita*-は *rakṣite* となり、語中母音 *-i* が脱落する事はなく、一方で Skt. *yaśasena*-については *-a* 語幹の固有名詞は語末母音が *-e* となり、期待される語形は *yaśasene**⁴⁴ である。このように語末母音 *-e* が脱落するのはトカラ語 A の特徴である。では、この題記はトカラ語 A 話者、或いはトカラ語 A に精通した者によって書かれたものであるか否かという点であるが、筆者はこの可能性はかなり低く、この題記は古代ウイグル語話者或いは古代ウイグル語を母語に近いレベルで運用していた者によって書かれたと考えるのが妥当であると考えられる。即ち、前者 Skt. *rakṣita*-における語中母音の脱落は、クチャのキジル発見とされる、古代ウイグル語話者によって書かれたと見られるブラーフミー文字表記の古代ウイグル語題記に *Buddhamtra* (< Skt. *buddhamitra*-) という語形が在証され、同様に語中母音 *-i* が脱落している事から (Maue 2015: 461-463)、古代ウイグル語の影響を受けたものであると推定され、また後者の *Yaśasem* については古代ウイグル語の人名にはトカラ語 A に由来するものもあり、敦煌に現存する古代ウイグル語題記には Skt. *ādityasena*-に由来する人名として *adityašin* が知られているが⁴⁴、この人名では語末母音 *-a* が脱落しており、トカラ語 A 起源のものと推定される。また、このトカラ語 B 題記が古代ウイグル語の影響を反映しているとする筆者の推定は、先に述べた動詞の人称からも裏付けられる。即ち、古代ウイグル語の題記では「私何某が [...] した」というタイプの構文を採る事が多く⁴⁵、この場合、固有名詞と動詞の一人称形が共起する事となる。このような文型はこのトカラ語 B 題記と一致していると言え、文法面からも古代ウイグル語の影響を受けたものとする推定を支持する。以上の点から、このトカラ語 B 題記は、上で紹介したクムトラ石窟窟群区第 79 窟の主室前壁窟門左側に書かれた題記と同様に、古代ウイグル語による影響を反映していると見られる⁴⁶。

では、このような古代ウイグル語の影響が見られるトカラ語 B を書いたのは、トカラ語 B を学んだ古代ウイグル語話者と古代ウイグル語を操る事ができるトカラ語 B 話者のどちらであろうか。現時点ではこの種の言語で書かれた資料が他には知られていないため、俄かに判断する事はできないが、吉田 (2011: 31-40) は Turco-Sogdian の使い手がチュルク化したソグド人であった可能性を論じている。本稿で論じたクムトラの題記は、Turco-Sogdian で書かれた資料が発見された地域とは異なっているが、ウイグル人が統治階級を占め、トカラ語 B に代わって古代ウイグル語が主流になるという歴史的背景の類似性に鑑みれば、古代ウイグル語を操る事ができるトカラ語 B 話者によって書かれたものである可能性が高いのではないだろうか。

4. 結論

本稿では、ベルリン所蔵のトカラ語 B 断片を利用し、ベゼクリク第 20 窟誓願図第 5 面に描

⁴⁴ この語末母音の対応については庄垣内 (1978: 91) を、またこの題記については松井 (2013: 39-40) を参照。

⁴⁵ この点については森安教授にご教示頂いた。篤くお礼申し上げます。なお、具体的な用例としては、松井 (2013: 34, 43 及び 2014: 32, 34, 35, 37) によって解読された題記を参照されたい。

⁴⁶ なお、このトカラ語 B の題記が書かれた壁面の向かい側の壁面にも漢語とソグド語の題記が書かれているが、ソグド語題記にも古代ウイグル語の影響が指摘されている。この題記については、吉田 (1990: 68-73) を参照。

かれた比丘に附されたブラーフミー文字題記 *silāsānte śilavānde* が「持律比丘 *Śilāsānte*」と解釈できる事を論じると共に、第 20 窟に描かれたその他の誓願図に見られる題記がサンスクリットで書かれているのとは異なり、この題記がトカラ語で書かれている可能性を指摘した。この題記はこれまで十分な解釈が提示された事はなく、語末母音の形式からトカラ語話者によって書かれたサンスクリットである可能性が指摘された事はあったが、筆者の解釈が正しければ、この題記はトゥルフアンで発見された壁画に附された題記としては最初のトカラ語題記であり、また同時に、ベゼクリク第 20 窟にこれらの誓願図が描かれたと推定される 11-12 世紀頃のウイグル仏教において、少なくとも宗教言語としてトカラ語は依然として重視されていた事を示唆する。加えて、この題記を附された比丘の姿はクチャ地域に見られるトカラ仏僧とは異なり、ウイグル仏僧の姿をしており、この比丘自体がウイグル仏教の影響を示していると言えよう。

なお、附言すれば、クチャ発見とされる B431 は先に見たように歴史文書ではなく、比喩譚である事が明らかになったため、*TochSprR(B)* II において *Geschichte und Kultur* として出版された断片は全てトゥルフアンで発見された事となる。森安 (2004) で出版されたトゥルフアン発見の古代ウイグル語文書はクチャ国の国王 *Suvarnapuspa* に言及しているが、このようなクチャ国の仏教史に関連する伝説を、ウイグル仏教徒は *TochSprR(B)* II において *Geschichte und Kultur* として出版されたような文献から受容していた可能性が浮かび上がる。

一方、ウイグル仏教とトカラ仏教との関連を示す美術資料は、本稿で解釈を与えたベゼクリク第 20 窟誓願図第 5 面のブラーフミー文字題記だけではない。筆者が別稿で指摘したように、シオルチュク発見の仏教壁画には、黒い帽子を被った人物にトカラ語 A による題記が附されているが、この人物の姿がクチャの仏教壁画に見られる様式ではなく、またトカラ語 A が題記に使用されている事から、伝統的なトカラ仏教を反映しない可能性のみを指摘しておいた。同じ地域で発見された仏教壁画にも同様の姿の人物が描かれており、この人物がウイグル人と判断される事から、ウイグル仏教においてトカラ語 A がシオルチュク地域で 10 世紀後半から 11 世紀前半頃までは少なくとも宗教言語として重視され、使用されていた事が窺える。

さらに、クムトラ石窟窟群区第 79 窟の寄進者像にはトカラ語 B による題記が附されていた事が明らかになったが、この題記には漢語及び古代ウイグル語も附されており、クチャ地域でトカラ語 B による題記を伴ったウイグル人寄進者が描かれるのは歴史的背景から考えて 10 世紀後半であると推定される事から、クチャ地域におけるウイグル仏教では 10 世紀後半までは少なくとも宗教言語としてトカラ語 B が依然として重視されていた事実を指摘する事ができる。なお、クチャ地域では石窟の寄進者像に附されたブラーフミー文字題記にはサンスクリットが使用されるのが通例であり、トカラ語 B によって書かれたものは管見の限り知られておらず、この点から見ても、トカラ語 B が重視されていた事が示唆される。

本稿で指摘したように、クチャ・シオルチュク・トゥルフアンといった西域北道の仏教の中心地から、ウイグル仏教との関連を示すトカラ語題記が発見されている事実は、10 世紀後半から 11-12 世紀頃のウイグル仏教において、少なくともトカラ語が宗教言語として重視されてい

た事を物語ると共に、ウイグル仏教の重要な基盤の一つがトカラ仏教であったとする所謂「トカラ仮説」を支持する傍証と言えよう。また、ウイグル人が新しい支配階級となった状況下のクチャのクムトラ石窟からは、古代ウイグル語の影響が指摘され得るトカラ語 B の題記を二つ発見する事ができた。この題記の書き手を確定する事はできないが、Turco-Sogdian と称される古代ウイグル語の影響を受けたソグド語の書き手がチュルク化したソグド人であった可能性を考慮すれば、チュルク化したトカラ語 B 話者であった可能性が指摘される。さらに、この仮説が正しいならば、この題記は現存するトカラ語 B 文献が示し得る最も遅い段階の資料となり、トカラ語 B が古代ウイグル語へと置き換えられる過程を示す資料として重要である。

従来、トカラ仏教とウイグル仏教との関係は、《Maitreyasamitināṭaka》に代表される文献資料や古代ウイグル語に見られるインド系借用語及び歴史学といった観点からの研究に重点が置かれ、美術資料を利用した研究はベゼクリクの誓願図とそれに関連するテーマに限定されていた感がある事は否めない。これは両者の関係を示す美術資料が極めて限定されている事に起因しているが、本稿で紹介した資料はトカラ仏教とウイグル仏教の関連を示す新しい資料であり、今後この方面の専門家によって利用され、研究が深化される事を期待してやまない。

[追記]

『東京大学言語学論集』第36号で発表した拙稿「ドイツ所蔵トカラ語 B 断片 THT1859-1860 について」において、筆者は THT1859-1860 が所謂「弥勒経典」に比定される事を主に漢訳仏典を利用して論じた。その議論の中で、筆者はトカラ語 B 断片 THT1859b5 の記述を根拠に「仏陀が涅槃に入ってから 57 億 6 百万年後に弥勒が現れる」という説がクチャ仏教に知られていた可能性に言及した。しかし、その後、THT1859b5 の年代は「57 億 6 百万年」ではなく、「5 億 7 千 6 百万年」と解釈すべきである点、及びこの年代は『阿毘達磨大毘婆沙論』卷 135 「五十七俱胝六十百千歳」(T.27, no. 1545, 698b15-16) の記載と一致する点を、麥文彪准教授(京都大学白眉センター)よりご教示頂いた。特に記して感謝申し上げますと共に、前掲拙稿 106 頁下から 9 行目、109 頁 1-5 行目及び 120 頁下から 8-4 行目の関連する記載をここに修正する。

参考文献

- Adams, Douglas Q. (2013) *A Dictionary of Tocharian B, revised and greatly enlarged*. Amsterdam: Rodopi.
- Bailey, D. R Shackleton (1950) Notes on the Divyāvadāna: Part I. *The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland* 3/4: 166-184.
- BHSD = Edgerton, Franklin (1953) *Buddhist Hybrid Sanskrit grammar and dictionary. Vol. II: Dictionary*. New Haven: Yale University Press.
- BHSG = Edgerton, Franklin (1953) *Buddhist Hybrid Sanskrit grammar and dictionary. Vol. I: Grammar*. New Haven: Yale University Press.

- Burnouf, Eugène (1876) *Introduction à l'histoire du Bouddhisme indien. 2e éd. rigoureusement conforme à l'édition originale et précédée d'une notice de Barthélemy Saint-Hilaire sur les travaux de M. Eugène Burnouf.* Paris: Maisonneuve.
- CEToM = <http://www.univie.ac.at/tocharian/?home>.
- DTA = <http://turfan.bbaw.de/dta-i-en>.
- Emmerick, Ronald E. and Edwin G. Pulleyblank (1993) *A Chinese text in Central Asian Brahmi script: New evidence for the pronunciation of Late Middle Chinese and Khotanese.* Roma: Istituto italiano per il Medio ed Estremo Oriente.
- Erdal, Marcel (2004) *A grammar of Old Turkic.* Leiden: Brill.
- エルミタージュ博物館・西北民族大学 (2011) 『俄藏錫克沁芸術品』上海: 上海古籍出版社.
- Gharib, Bhadresaman (1995) *Sogdian dictionary: Sogdian-Persian-English.* Tehran: Farhang.
- Huber, Edouard (1914) Études bouddhiques. *Bulletin de l'École française d'Extrême-Orient.* 14: 9-19.
- IDP = <http://idp.bl.uk/>.
- Kasai et al. (2013) = Y. Kasai, A. Yakup and D. Durkin-Meisterernst (eds.) *Die Erforschung des Tocharischen und die alttürkische Maitrisimit.* Turnhout: Brepols.
- 橘堂晃一 (2013) 「ウイグル仏教におけるベゼクリク第 20 窟の歴史的意義」In: 龍谷大学アジア仏教文化研究センター(編) 『トゥルフアンの仏教と美術—ウイグル仏教を中心に—: シルクロードの仏教文化—ガンダーラ・クチャ・トゥルフアン—第 2 部(2012 年度第 1 回国際シンポジウムプロシーディングズ)』京都: 龍谷大学, 141-168.
- Konczak, Ines (2013) Origin, Development and Meaning of the Prañidhi Paintings on the Northern Silk Road. In: 龍谷大学アジア仏教文化研究センター(編) 『トゥルフアンの仏教と美術—ウイグル仏教を中心に—: シルクロードの仏教文化—ガンダーラ・クチャ・トゥルフアン—第 2 部(2012 年度第 1 回国際シンポジウムプロシーディングズ)』京都: 龍谷大学, 43-75.
- Le Coq, Albert von (1913) *Chotscho: Facsimile-Wiedergaben der wichtigeren Funde der ersten königlich preussischen Expedition nach Turfan in Ost-Turkistan.* Im Auftrage der Generalverwaltung der königlichen Museen aus mitteln des Baessler-Institutes. Berlin: D. Reimer.
- Le Coq, Albert von and Ernst Waldschmidt (1933) *Die Buddhistische Spätantike in Mittelasien VII. Neue Bildwerke III.* Berlin: D. Reimer and E. Vohsen (repr. Graz, 1975).
- 梁志祥・丁明夷 (1985) 「新疆庫木吐拉石窟新發現的幾處洞窟」『文物』1985 年第 5 期: 1-6.
- Lüders, Heinrich (1913) Die Prañidhibilder im neunten Tempel von Bāzāklik. *Sitzungsberichte der Königlich preussischen Akademie der Wissenschaften* 2: 864-884. Repr. In: *Philologica Indica: Ausgewählte kleine Schriften von Heinrich Lüders.* Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1940, 255-274.
- Malzahn, Melanie (2007) The most archaic manuscripts of Tocharian B and the varieties of the Tocharian B language. In: Melanie Malzahn (ed.), *Instrumenta tocharica.* Heidelberg: Winter, 255-297.

- 馬世長 (1985) 「クムトラにおける漢民族様式の石窟」新疆ウイグル自治区文物管理委員会・庫車県文物保管所(編)『中国石窟 クムトラ石窟』東京: 平凡社, 218-249.
- 松井太 (2013) 「敦煌諸石窟のウイグル語題記銘文に関する筭記」『弘前大学人文学部人文社会論叢(人文科学篇)』第30号: 29-50.
- 松井太 (2014) 「敦煌諸石窟のウイグル語題記銘文に関する筭記(二)」『弘前大学人文学部人文社会論叢(人文科学篇)』第32号: 27-44.
- Maue, Dieter (1996) *Alttürkische Handschriften. Teil 1. Dokumente in Brāhmī und Tibetischer Schrift*. Stuttgart: Franz Steiner.
- 森美智代 (2015) 「亀茲石窟の“立仏の列像”と誓願図について」『佛教藝術』340号: 9-36.
- 森安孝夫 (1989) 「トルコ仏教の源流と古トルコ語仏典の出現」『史學雑誌』98-4: 1-35.
- 森安孝夫 (1991) 『ウイグル=マニ教史の研究』大阪: 大阪大学文学部.
- 森安孝夫 (2004) 「亀茲国金花王と硃砂に関するウイグル文書の発見」三笠宮殿下米寿記念論集刊行会(編)『三笠宮殿下米寿記念論集』東京: 刀水書房, 703-716.
- 森安孝夫 (2007) 「西ウイグル仏教のクロノロジー: ベゼクリクのグリユンヴェーデル編号第8窟(新編号第18窟)の壁画年代再考」『佛教学研究』62/63: 1-45.
- 森安孝夫 (2015) 『東西ウイグルと中央ユーラシア』名古屋: 名古屋大学出版会.
- 村上真完 (1984) 『西域の仏教: ベゼクリク誓願画考』東京: 第三文明社.
- MW = Monier-Williams, Monier (1899) *Sanskrit-English dictionary*. Oxford: Clarendon.
- 西村陽子・北本朝展 (2010) 「スタイン地図と衛星画像を用いたタリム盆地の遺跡同定手法と探検隊考古調査地の解明」『敦煌写本研究年報』第四号: 209-245.
- Ogihara Hirotooshi (2014) Fragments of secular documents in Tocharian A. *Tocharian and Indo-European Studies* 15: 103-129.
- Ogihara Hirotooshi (2015a) Kuchean verses written on a wooden tablet kept at Xinjiang Kucha Academy. In: Melanie Malzahn et al. (eds.) *Tocharian texts in context: International conference on Tocharian manuscripts and Silk Road culture, June 25-29th, 2013*. Bremen: Hempen, 149-157.
- Ogihara Hirotooshi (2015b) The Transmission of Buddhist texts to Tocharian Buddhism. *Journal of the International Association of Buddhist Studies* 38: 295-312.
- 萩原裕敏 (2015c) 「俄国国立艾爾米塔什博物館所蔵庫車、錫克沁壁画題記」朱玉麒(編)『西域文史』第十輯: 33-42.
- 萩原裕敏 (2016) 「ドイツ所蔵トカラ語 B 断片 B384 について」『東京大学言語学論集』37号 (eTULIP), see <http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/bulletin/#54-1>.
- 小田壽典 (1987) 「ウイグルの稱號トゥトゥングとその周邊」『東洋史研究』46-1: 57-86.
- Panglung, Jampa Losang (1981) *Die Erzählstoffe des Mūlasarvāstivāda-Vinaya analysiert auf Grund der tibetischen Übersetzung*. Tokyo: The Reiyukai Library.
- Peyrot, Michaël (2008) *Variation and change in Tocharian B*. Amsterdam: Rodopi.

- Peyrot, Michaël (2010) Proto-Tocharian syntax and the status of Tocharian A. *The Journal of Indo-European Studies* 38: 132-146.
- Peyrot, Michaël (2013) *The Tocharian subjunctive: a study in syntax and verbal stem formation*. Leiden: Brill.
- Pinault, Georges-Jean (1987) Épigraphie koutchéenne, I. Laissez-passer de caravanes, II. Graffites et inscriptions. In: Chao Huashan, Simone Gaulier, Monique Maillard and Georges-Jean Pinault, *Sites divers de la région de Koutcha* (Mission Paul Pelliot VIII). Paris: Collège de France, 59-196.
- Pulleyblank, E. G. (1991) *Lexicon of reconstructed pronunciation in Early Middle Chinese, Late Middle Chinese, and Early Mandarin*. Vancouver: UBC Press.
- 慶昭蓉 (2013) 「亀兹石窟現存題記中的亀兹国王」『敦煌吐魯番研究』第十三卷: 387-418.
- Sander, Lore (1968) *Paläographisches zu den Sanskrithandschriften der Berliner Turfansammlung*. Wiesbaden: Franz Steiner.
- Sander, Lore (2005) [2009] Remarks on the Formal Brāhmī Script from the Southern Silk Route. *Bulletin of the Asia Institute* 19: 133-144.
- 新疆ウイグル自治区文物管理委員会・庫車県文物保管所 (1985) 『中国石窟 クムトラ石窟』東京: 平凡社.
- 庄垣内正弘 (1978) 「‘古代ウイグル語’におけるインド来源借用語彙の導入経路について」『アジア・アフリカ言語文化研究』15: 79-110.
- 庄垣内正弘 (2003) 『ロシア所蔵ウイグル語文献の研究』京都: 京都大学.
- Silk, Jonathan A. (2008) *Managing monks: administrators and administrative roles in Indian Buddhist monasticism*. Oxford: Oxford University Press.
- T. = *Taishō Tripiṭaka*.
- Tamai Tatsushi (2011) *Paläographische Untersuchungen zum B-Tocharischen*. Innsbruck: Institut für Sprachen und Literaturen der Universität Innsbruck.
- Thomas, Werner (1986) Zur Stellung von *toch. A num*, *B nano* ‘wieder’ innerhalb des Satzes. *Zeitschrift für Vergleichende Sprachforschung* 99: 117-146.
- TITUS = <http://titus.fkidg1.uni-frankfurt.de/texte/tocharic/tht.htm>.
- TochSprR(A)* = Sieg, Emil and Wilhelm Siegling (1921) *Tocharische Sprachreste. I. Band: Die Texte, A. Transkription; B. Tafeln*. Berlin / Leipzig: de Gruyter.
- TochSprR(B) II* = Sieg, Emil and Wilhelm Siegling (1953) *Tocharische Sprachreste. Sprache B. Heft 2. Fragment Nr. 71–633*. Aus dem Nachlass hrsg. von Werner Thomas. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- Vaidya, P. L. (1959a) *Divyāvadāna* (Buddhist Sanskrit Texts, No. 20). Darbhanga: The Mithila Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning.
- Vaidya, P. L. (1959b) *Avadāna-kalpalatā*. [2 vols.] (Buddhist Sanskrit Texts, No. 22, 23). Darbhanga: The

- Mithila Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning.
- Vogel, Claus and Klaus Wille (1996) The final leaves of the Pravrajyāvastu portion of the Vinayavastu manuscripts found near Gilgit: Part 1 Saṃgharaksitāvadāna. In: Gregory Bongard-Levin, Daniel Boucher, Fumio Enomoto et al. (eds.) *Sanskrit-Texte aus dem buddhistischen Kanon: Neuentdeckungen und Neueditionen III*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 243-296.
- Wilkins, Jens (2015) Buddhism in the West Uyghur kingdom and beyond. In: Carmen Meinert (ed.) *Transfer of Buddhism across Central Asian networks (7th to 13th centuries)*. Leiden: Brill, 191-249.
- 新疆龟兹研究院・北京大学歴史学系中国古代史研究中心・中国人民大学国学院西域歴史語言研究所 (2015) 「克孜爾石窟谷西区 39 窟現存龟兹語及其他婆羅謎文題記簡報」朱玉麒(編)『西域文史』第十輯: 15-32.
- 新疆維吾爾自治區博物館・新疆人民出版社 (1997) 『新疆石窟: 庫車庫木吐拉石窟』上海: 上海人民美術.
- 吉田豊 (1990) 「新疆維吾爾自治區新出ソグド語資料—1990 年調査旅行報告—」『内陸アジア言語の研究』(SIAL) 第 VI 号: 57-83.
- Yoshida Yutaka (2009) Turco-Sogdian features. In: Werner Sundermann et al. (eds.) *Exegisti monumenta: Festschrift in honour of N. Sims-Williams*. Wiesbaden: Harrassowitz, 571-585.
- 吉田豊 (2011) 「ソグド人と古代のチュルク族との関係に関する三つの覚え書き」『京都大学文学部研究紀要』50: 1-41.
- 莊強華 (1986) 「庫木吐拉第 79 号窟初探」『新疆文物』1986 年第 1 期: 75-79.
- Zieme, Peter (1977) Drei neue uigurische Sklavendokumente. *Altorientalische Forschungen* 5: 145-170.
- Zieme, Peter (1981) Uigurische Steuerbefreiungsurkunden für buddhistische Klöster. *Altorientalische Forschungen* VIII: 237-263.
- Zieme, Peter (2012) Some Notes on Old Uigur Art and Texts. In: Research Center for Buddhist Cultures in Asia, Ryukoku Universtiy (ed.): *Buddhism and Art in Turfan: From the perspective of Uyghur Buddhism – Buddhist culture along the Silk Road: Gandhāra, Kucha, and Turfan, Section II* [International symposium series 1]. Kyoto: Research Center for Buddhist Cultures in Asia, Ryukoku Universtiy, 5-37.

Tocharian Caption Found in a Praṇidhi Scene in the Bezeklik Cave No. 20

Ogihara Hirotoshi

Keywords: Kuchean Buddhism, Uyghur Buddhism, Bezeklik, Praṇidhi scene

Abstract

This paper aims to provide a novel interpretation of a Brāhmī caption written on the cartouche near the right foot of the Buddha depicted in the Praṇidhi scene No. 5 in the Bezeklik Cave No. 20 in Turfan. The identification of B431 as part of the *Saṅgharakṣitāvadāna*, housed in the Berlin Turfan collection, allows us to elucidate the meaning and etymology of Tocharian B word *silavānde* ‘well-conducted (monk)’ which thus far appeared only in this fragment. Owing to the equation of this word with an Indic loanword from Skt. *śīlavat-* ‘well-conducted’ through Middle Indic language, the Brāhmī caption *śīlaśānte silavānde*—that was found in the Bezeklik Cave No. 20 and was ambiguous since its publication in 1913—can now be interpreted as ‘*Śīlaśānte*, a well-disposed monk’. If my interpretation of this caption as being in Tocharian is correct, this will be the first Tocharian caption found in Turfan which suggests that Tocharian was being used at least for religious purposes in Uyghur Buddhism approximately during the eleventh and twelfth centuries. In addition to this newly identified Tocharian inscription, other Tocharian inscriptions will be introduced which can confirm that Tocharian A was used in Shorchuk, while Tocharian B (i.e. Kuchean) was used in Kucha approximately from the second half of the tenth century to the eleventh century at least for religious purposes in Uyghur Buddhism. It is also noteworthy that the two Kuchean inscriptions found in the Kumtura grottoes near Kucha attest to the language contact between Kuchean and Old Uyghur.

(おぎはら・ひろとし 京都大学白眉センター/文学研究科)